君に届かない愛を。

吟瀬夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君に届かない愛を。

【Ｎコード】
Ｎ２５４５Ａ

【作者名】
吟瀬夏樹

【あらすじ】
当たり前のように戦争が始まって、『僕』だけがそれを受け入れることができない――失った命がもどらないことを知っているから、彼は静かに引き金を引いた。涙は出なかった。変わっていく世界と、変われない自分。それがもどかしくて、彼はその箱庭から飛び出すのだった。

プロローグ　彼の世界について

何処までも白く、君は歩いてゆけるのだから。
汚れた僕の手など、はやく
振り払って。
※※※
僕が小学校にあがる少しまえに、この限りなく無意味で愚かな戦争は始まった。
理由はしらない。
知っていたとしても何も変わらないし、どんな理由があっても世界を壊していい訳がない。
だから、知らないままでもいいと思っていた。僕が通っているのは私立のそこそこ頭のいい中学で、比較的、戦争の影響をあまり受けていない。
政府官僚の子供が多く通っているから、と近所の主婦と母親が話しているのを聞いたことがあるが、それとは少し違う。
重要な子供を特別扱いしているには違いないが、それは純粋に親が子供を思っての行動ではないのだ。
むしろ、真逆の感情で僕らは守られ、そして生かされている。
ここに通っている子供は、『希少種』だ。
この言葉の意味を理解するのに一年かかり、そして受け入れるのにまた一年かかった。
そしてこの最悪の義務教育の最後の一年、僕は一番大切なものを守る為に戦わなければいけないんだ。『希少種』として、人ではない悪魔として。
僕らはそれでも、守る為に戦う・・・・・・

第?話　君が守ったちいさなモノ

何の為に生きているのかと聞かれたら、自分の為と僕はこたえる。
誰かの為に生きているという人は、きっと僕を蔑むのだろうけど・・・
。
※※※
朝、あたりまえに目を醒まして―――僕はすこしの絶望と、それをすこしだけ上回る希望に瞳を細めた。それだけが、今の僕が感じられる感情だった。
。
※※※
朝食をとるために服を着替え、寮の中にある小さな食堂へ向かった。校内にはもうすこしちゃんとした設備のやつがあるけど、味はたいして変わらないので僕はいつもここを利用している。
安っぽい飯店を思わせる硝子張りのドアの向こうには、幾つかの人影があった。地味に賑わっている。
「創」
それが自分の名前だと気付くのに、すこしの時間がかかった。
「・・・・・創治！」
二度目で振り返ると、何故か眉を吊り上げた幼なじみと目が合う。元気というか、威勢の良さだけが取り柄みたいな小娘だった。
「呼んでるんだから返事しなさいよ」
と、顔を背けながら言う。不機嫌さを隠そうともせずに、彼女は狭い食堂でも大声だった。
「・・・・・・、おはよう」
うんざりして言うと、そいつは満足そうに笑った。間違っても、心を奪われたりしない悪質な笑みだった。

「おはよう。今日も辛気臭い顔ね・・・・・見た目だけが取り柄なんだからしっかりしなさいよ」その言葉の途中で、僕はわざとらしく嘆息した。
「だからなんだ？」
彼女の横を通りすぎようとしたら、信じられない握力で利き手の手首を掴まれた。
本気で痛い。
くやしいから、表情には出してやらないけど。
「なんだとは何よ！」
ここまでマニュアル通りな人間を僕は彼女以外にしらない。
「僕がどんな顔でどこにいようと、君には関係ないだろ？」
勝ち気な瞳を睨み付けてやる。
彼女がたじろいだ瞬間を狙って、僕は極めて紳士的に微笑んだ。
「わかったら、さっさとその汚い手を話せよ」
「なっ・・・・・！」
「痛いんだよ、馬鹿力」
絶句した彼女を無視して、僕はカウンターから一番遠い席に腰掛けた。
殺意すら篭った視線が背中を射ぬいてくるが、それも無視する。
「創、おはよ」
と、目の前にはいつの間にかひとりの少年の姿があった。
「・・・・・おはよう」
あくびを噛み殺しながら挨拶すると、そいつは僕と僕に殺意を向けている女を見比べて苦笑した。
色素の薄い髪が揺れる。
「また宮坂さんに何か言ったの？」
「宮坂って誰だよ？」
本気でこころあたりがなかったので聞いた。
それに彼は目を見開く。
「えっ・・・・・・」

「だ、か、ら。宮坂って誰？」
「創・・・さっきまで、果てしなく仲悪そうに話してたじゃないか・・・・」
そう言ってまだ入口で唸っている彼女に一瞥した彼に、僕は
「ああ」と頷いた。
―――宮坂。
それが彼女の名前だった。
僕は一度たりとも呼んでやったこともないし、彼女も僕に対して名乗ったりはしない。
はじめまして、と僕が手を差し出した瞬間ですら、彼女は名前を言わなかった。それ以来、僕は彼女を敵だと認識している―――ファーストネームは、いまだに知らない・・・・・・。
「宮坂さん、また怒るよ」
「仕方ないだろ・・・・・」
人の名前なんて、いちいち覚えてられない。自分の役に立たない奴なら特に。
「問題です。オレの名前は？」
「・・・・・・・」
「うわぁ、真面目に傷付くな・・・・・」
と、左胸を押さえてうずくまる彼に、僕は笑いかけた。
「冗談だよ、皆瀬」
それが彼の名だった。
僕の数少ない友達のひとり、皆瀬要。
相手は友達と思ってくれてるかどうかは、知らないけど。
「いや、創の場合すべてがオレの名前を思いだす時間かせぎかも・・・・」
「否定はしない」「ひどいなぁ」
そう言ってまた笑う彼を、僕は友達だと思っていた。たぶん現在進行形で。これからもずっと。
※※※

朝食は、皆瀬が勝手に注文したビビンバを食べた。
朝から意味不明なチョイスだ。
しかもドリンクはミルクだった。
遠くで、宮坂（たぶん今日中でまた忘れる）も何故だか同じものを食べていた。
×ゲームか？
とか思ったけど何も言わなかった。
毎日は、それでもぎりぎりのところで平和だった。

第?話　悪趣味な授業。

最初に忘れたのは声。
※※※
それは触れると温かくて、深い赤だった。
その液体の正体に気付いたとき、僕は何も思えなかった。
ただ汚れた手を見つめて、指先で触れたことを後悔した。
教室の窓は、硝子の部分だけ綺麗に切り取られていた。白い窓枠にも血が飛び散っていたが、それよりも机な下に転がった誰か、もしくは何かの手首に視線はくぎづけにされていた。
手を伸ばして拾いあげると、まだ温かかった。断面からは血が滴っていて、それに気付いた宮坂が短く叫んだ。
感情の箍らない悲鳴は、幼稚な悪戯を思い出させた。虫を頭に乗せられた幼い頃の宮坂も、同じような声を出していた。
登校していた過半数の生徒は、原型を留めない死体になって僕らの足元にいた。
ひとりで叫び続ける宮坂が、その中のひとつを踏み潰して壊した。
「な、なによ」
引き攣った喉の奥から、彼女はなんとか音を発した。唇の端が震えている。「なによ、これ！」
「・・・・・・・・っ」
遅すぎる緊張と、警戒が身体中に広がった。
「創・・・・・これは」
聞いてくる皆瀬に、僕は頷く。
顎を伝って流れた嫌な汗が、制服の襟に染み込んだ。「最悪だ。敵さん、プロみたいだよ」
皆瀬が僕の言葉に舌打ちして、隠し持っていたスローイングナイフを利き手に持ち替える。
刃の構え方は静かなものだったが、それを持つ手は震えていた。

訓練しか経験のない僕らにとって、本物の戦場とは恐怖でしかない。
希少種であっても、ただの中学生なのだから。
「逃げろ皆瀬。宮坂もだ」
僕は静かに、この静寂の中の何よりも穏やかに言った。
戦うということ。
死ぬということ。
僕は、それをよく知ってる。
「でも、君は・・・・・」
言いかける皆瀬を制して、僕は続けた。
いつの間にか気を失った宮坂が、倒れてまた誰かの頭蓋を壊していた。
「君は、どうするの？」
それに微笑もうとして、もうそんな余裕はどこにもないことを気付いた。
立ち尽くす皆瀬の頬を、薄い風の刃が傷つける。
「楽しかった」
僕は笑った。
皆瀬は泣いていた。
「創、治・・・・・？」不思議そうに呟く皆瀬を、僕は、僕のチカラは抱き上げた。
すこし離れた位置の宮坂ね身体も、同じ速度で浮き上がる。
「この二年、お前といて楽しかった」
「君、何言って・・・・・・」
「お前は、僕や宮坂に迷惑かけられて嫌だったかもしれないけど」
そこから先は、自分にだけ聞こえるくらいの声で。
僕は囁いた。
「自分が、許されたみないな気がして・・・・・」
敵のチカラが風を操って、僕らを襲う。
三人の髪がなびいた。
「ありがとう・・・・・」

意識もないのに、宮坂も泣いていた。
何かに阻まれて声は届かないのひに、皆瀬は必死に何かを叫んでいた。
二人を見たのは、それが最後だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2545a/

君に届かない愛を。

2010年10月9日02時18分発行